

経験者・当事者・関係者による 摂食障害者回復支援のNPO活動 —参加中断者と継続参加者の現状調査

- ・NPO法人あかりプロジェクト 村田いづ実, 園田美貴, 高橋美香, 松田章之
- ・追手門学院大学心理学部 中村このゆ
- ・一般社団法人愛媛県摂食障害支援機構 鈴木 ころろ
- ・ともあしの会 矢崎 千亜紀
- ・ピアフル 谷口 春音

第21回日本摂食障害学会・学術集会
2017,10,21(土)
於 広島県医師会館

日本摂食障害学会 COI開示

筆頭発表者名: 村田いづ実

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある 企業等はありません。



1. 問題と目的

- ・安田と松下はアルコール依存症の回復におけるセルフヘルプグループ(以下SHG)の機能について、回復群は治療群に比べて永続的にグループに参加定着しており、その参加姿勢も積極的であったとしている。(安田,松下, 2001)
- ・三好は自助グループ「生活の発見会」を対象としたケース研究において、SHGにおける回復メカニズムによって「回復」するためには、まずコミュニティの成員になる必要があると考えられる」と延べ、参加者の定着を促した要因、定着を阻害する要因、定着する決め手を抽出した(三好,2014)。
- ・昨年度は「あかりトーク」メンバーの継続的参加を阻む要因を調査し、自助グループ活動が少なくとも侵襲的ではないとの考察を得た。また、他グループへの調査では、グループの形態を問わず1~2回で参加を止める利用者の割合がほぼ共通していることが明らかになった(村田・園田・高橋・松田・中村,2016)。今年度も引き続きグループへの参加中断について継続参加者も含めて現状を調査し、当事者による自助グループ活動の意義を検討する。



2. 方法(1)

■調査方法:

自助グループへの参加中断や継続に関するウェブアンケートを実施。摂食障害の自助グループやウェブコミュニティを運営している4団体が、各団体のメールマガジン、ブログ、ウェブサイトなどで呼びかけて協力者を募った。

■研究協力者:

全国の摂食障害自助グループやサポートグループに1回以上参加したことのある摂食障害本人や経験者

■調査実施期間:

2017年7月10日(月)～2017年8月31日(木)

■回答件数:

86件 内、有効回答82件

※倫理的配慮。当事者や他のグループリーダーの発言を用いる場合は、本研究の趣旨を説明し、充分理解した上で、同意が得られた者のみを対象とした。



2. 方法(2)

■調査項目:

基本情報

Q1. 症状について

Q2. 自助グループへの参加形態について

Q3. どうして自助グループに通っていますか(いましたか)。あなたなりに感じる自助グループ参加の利点を教えてください。

Q4. 自助グループに参加しない選択をするようになった理由はなんでしたか。(10項目について4件法)

Q5. Q4(「孤立感を覚えた、傷ついてしまったなど不快な体験があったから」で「あてはまる」「ややあてはまる」にチェックをお付けになった方はお差支えなければどんな体験をなさったかを教えてください

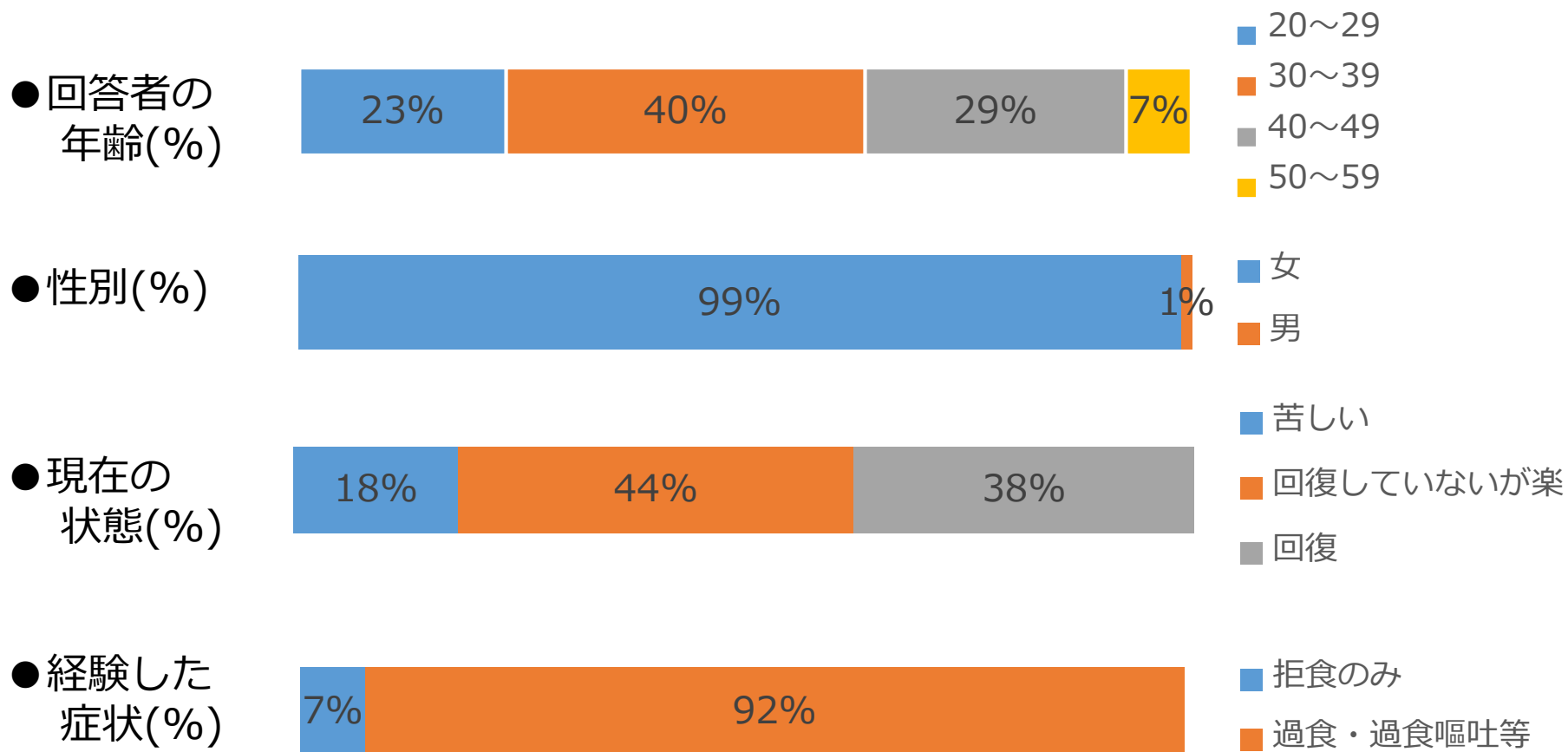
Q6. Q4「期待していた内容と違ったから」で「あてはまる」「ややあてはまる」にチェックをお付けになった方は何を期待なさっていたか、どんな風に違っていたかお聞かせください

Q7. Q4「他の支援が見つかったから」で「あてはまる」「ややあてはまる」にチェックをお付けになった方はどんな支援を見つけたかお聞かせください

Q8. Q4の中で最も大きな理由を1つだけ選んで○をお付けください

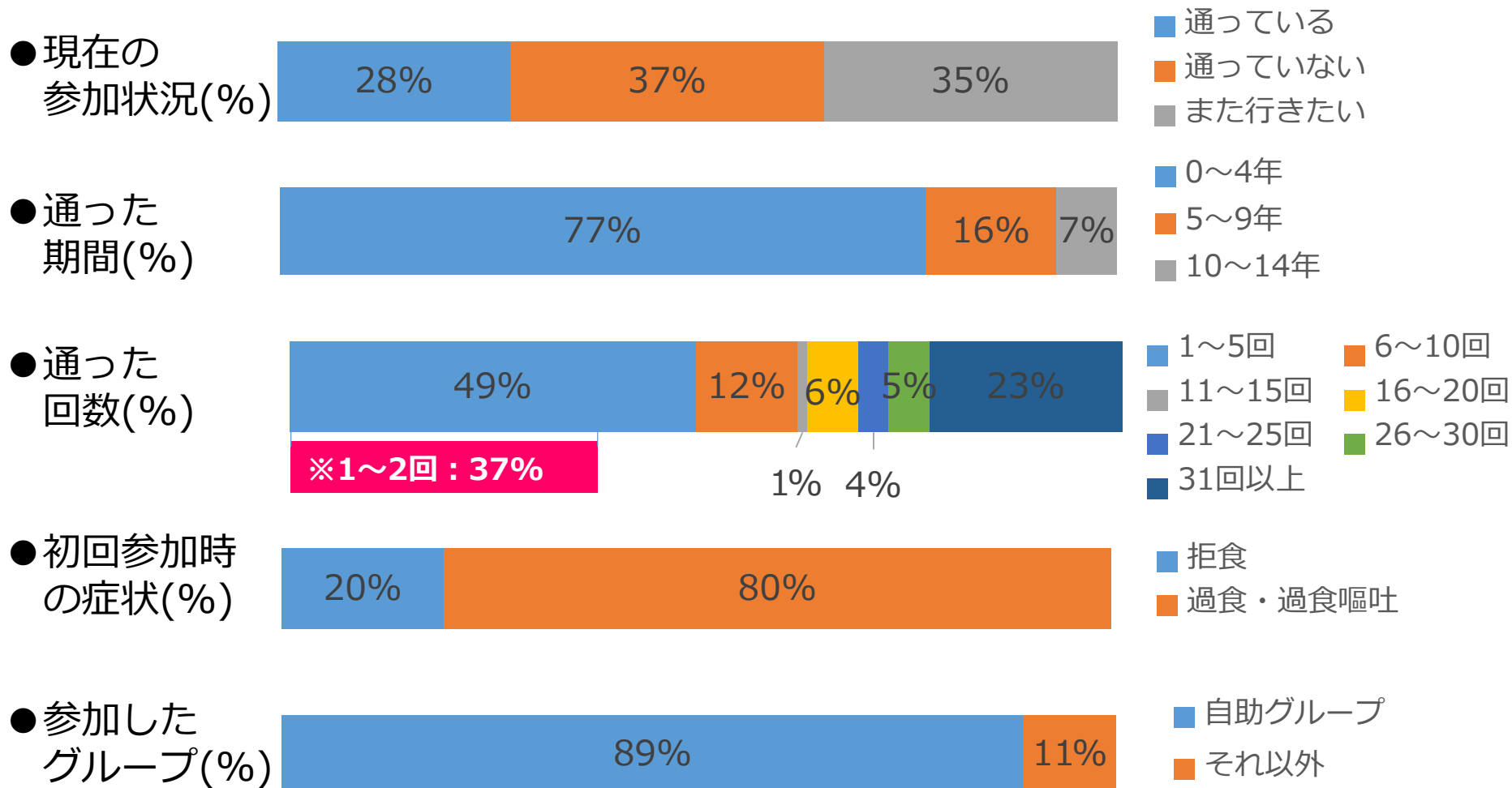


3. 結果(1) 調査協力者の属性



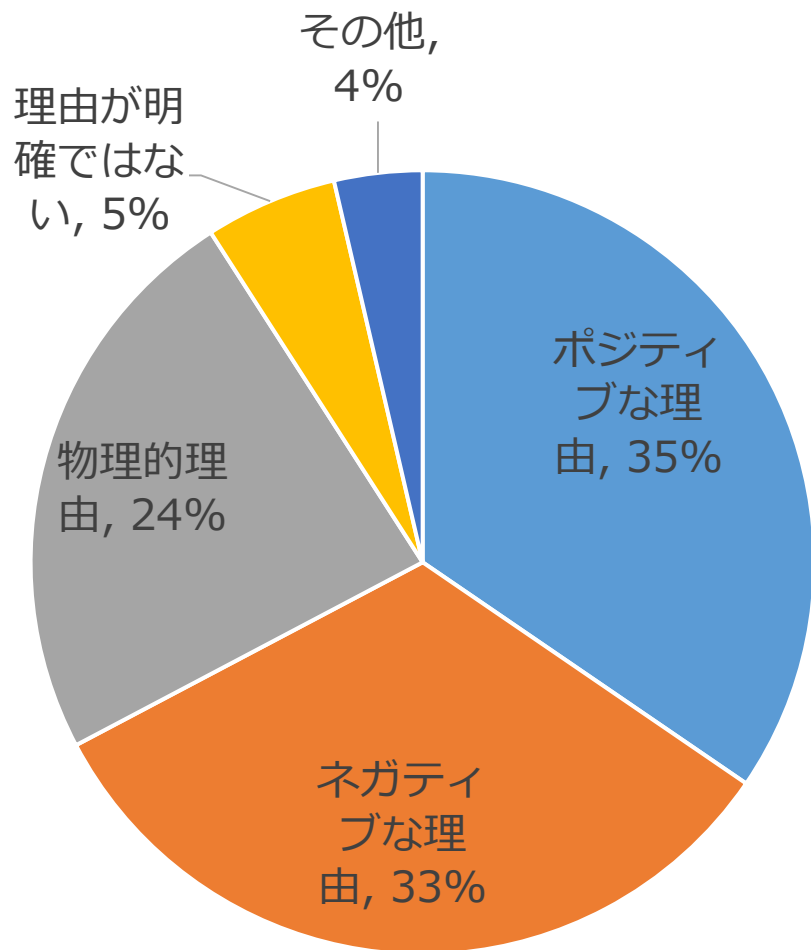


3. 結果(2) 自助グループへの参加状況





3. 結果(3) 参加終了理由



Q4の10項目	
ネガティブ	症状や年代や性別など、他メンバーとの違いを感じたから
	孤立感を覚えた、傷ついてしまったなど不快な体験があったから
	グループ(集団)が苦手だから
	期待していた内容と違ったから
物理的	時間や費用、会場までの距離などの物理的な理由から
ポジティブ	参加したことで気持ちが落ち着いて満足したから
	家事や仕事など他のことで忙しくなったから
	他の支援が見つかったから
	すっかり良くなったから
不明確	何となく、また行こうという気が起こらないから
	その他

※ポジティブな理由の半数が「忙しくなった」
 ネガティブな理由の半数が「他メンバーとの違い」



4. 考察

- ・回答者の82%は楽になったと感じていたり回復した人たちであることや、初回参加時症状の80%が過食や過食嘔吐であったことから、比較的病態の軽い人たちが自助グループに繋がっている可能性が考えられる。
- ・経験した症状では「拒食のみ」が7%であったのに対し、初回参加時の症状の「拒食」は20%であった。13%の人たちはグループ参加後に拒食以外の症状に転じている可能性が考えられる。また、医療機関を対象とした実態調査における摂食障害受診患者数のうち拒食症患者の割合は52%であった(安藤,2017)ことを鑑みると、医療機関と自助グループではその割合にかなりの差があることが示唆される。
- ・グループの利用は半数の人が5回以下、9割の人が10年未満であった。
- ・参加を中断した最も大きな理由ではポジティブな理由と物理的理由で59%を占め、中断の理由は必ずしもネガティブな理由だけではないことが示唆される。



5. 結語 今後の課題

・今回の結果から、当事者による自助グループに通う人の像として、特に過食や過食嘔吐の人、楽になってきた人など、症状が比較的軽い人たちが参加し、5回以下、10年未満で参加終了していく、といった傾向が見られた。また、3割の人がネガティブな理由で去っていく一方で、半数以上はポジティブな理由や物理的理由で終了していた。

・岡は「本人の会」が「本人の会」である所以は「選ぶ自由と自発性」にあると述べ、SHGへ参加するかどうかの自由があることが自発性へと繋がる大切な視点であると述べている(岡,1999)が、今回の結果から、当事者による自助グループにはそういった自由が担保されており、参加者もその自由を行使していると示唆された。

・さらに、もう一つの参加者像として、参加者は医療機関のような介入の無い場であることを了解の上参加していることから能動的な状態であると推察できる。それは受動的な状態よりも人生に向き合うという意味でより強く苦しむ状態とも言え、その苦しみが助けを求めたいという希求を生むのではないかと思われる。そこからは「能動的な問題解決のツールとしての自助グループ」という仮説が浮かび上がってくる。それらについても今後検証していきたい。

・今後は統計的に詳細な分析を加え、当事者による自助グループの意義をさらに探索していきたい。また、病院受診者や専門家が関わるサポートグループ参加者の実態も調査し、それぞれの役割や意義を明確にしていきたい。



【文献】

安藤 哲也(2017)摂食障害の診療体制整備に関する研究,厚生労働科学研究成果データベース(<http://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/NIDD00.do?resrchNum=201616020A>)

板東 充彦,吉良 安之(2002-03-31)セルフヘルプ・グループ参加メンバーの体験と対人関係の築き方との関係 : 「生活の発見会」における調査,九州大学心理学研究 3, p49-57

Katz, A. H.(1993) *Self-help in America : a social movement*,Twayne Pub ,久保紘章監訳,1997,『セルフヘルプ・グループ』岩崎学術出版社, p41-52

三好 真人(2014-10)セルフヘルプ・グループへ参加者が定着することに関する要因の分析 : 「NPO法人・生活の発見会」におけるケース研究,日本森田療法学会雑誌 25(2) , p141-150

村田いづ実,園田美貴,高橋美香,松田章之,中村このゆ(2016)経験者・当事者・関係者による摂食障害者回復支援のためのNPO活動,第20回日本摂食障害学会学術集会抄録集

野村 佳絵子(2003)自助グループの有効性--摂食障害の場合,竜谷大学社会学部紀要 (23), p25-33

岡知史(1999)セルフヘルプグループ—わかちあい・ひとりだち・ときはなち,星和書店, p95

新野 三四子(1989)摂食障害患者のセルフ・ヘルプ・グループについての一考察--グループの性格の検討を中心に,ソ・シャルワ・ク研究 15(3), p221-228

山川 麻美,坂口 典子,小泉 典章(2007-08)長野県精神保健福祉センターにおけるギャンブル嗜癖問題に関する取り組み,信州公衆衛生雑誌 2(1), p54-55

安田 美弥子,松下 年子(2001-09-25)依存症の回復におけるセルフヘルプグループの機能の研究(2):回復群と治療群の比較,東京保健科学学会誌 4(2), p83-88, 日本保健科学学会